韋駄天の記

劇作家 岡部耕大

言葉に「想い」重ね

わたしは劇作を生業としている劇作家である。昔は「劇作家とはどんな作家なのですか」とよく質問されて困惑したものである。「劇を書く作家です」と応じるしかなかった。同じ長崎県出身のいまは亡き脚本家市川森一さんからも「劇作家はわたしの憧れの職業なのです」といわれたことがある。あれだけの脚本を書く人からである。

確かに舞台は言葉で成立している。その言葉に想いと肉体が重なって成立している。脚本は映像が優先される。台詞のカットや直しは日常茶飯事である。わたしも映画では苦い経験をした思い出がある。「なんであの台詞をカットするんだ」「はあ」。

ただ、舞台にも商業演劇から小劇場までいろいろある。商業演劇はスターがあっての演劇である。小劇場は言葉の劇場ともいえる。

1980年にラジオドラマとして「精霊流し」を書いた。8月15日、松浦市志佐川の精霊流しの夜が舞台である。この舞台はいまも日本各地で小劇場系の劇団が上演してくれている。北海道の劇団の上演料はじゃが芋だったりする。

いまは、映画「長崎の鐘」の準備に追われている。撮影できれば念願の映画監督である。ご存じ、永井隆と秋月辰一郎の友情と確執の物語である。それと、10月に紀伊國屋ホールで初演する「姉しゃま―円谷幸吉とその時代―」を書いている。由緒ある家の人を「おばばしゃま」「おかかしゃま」「姉しゃま」といった。

「姉しゃま」にはモデルがいる。いま、長崎市に在住している和子姉さんである。和子姉さんは松浦市志佐町の旧家の5人姉妹の末っ子だった。わたしの少年時代、和子姉さんは伊万里商業の濃紺の制服と赤のリボンで、新御厨町星鹿の旅籠を営んでいた祖母の家によく遊びに来ていた。和子姉さんは、父を「兄しゃま」と呼び慕っていた。それがうれしかった。

劇作家仲間で「生涯、憧れている人はいるのかいないのか」といった議論になることがある。大概の人はいるという。それを憧れの人に打ち明けたかどうか。それも議論になる。わたしは、いまこうやって打ち明けている。なぜタイトルを「韋駄天の記」にしたのかも、おいおいわかっていただけるはずである。

（松浦市出身）

おかべ・こうだい　1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。69歳。